The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子宮頸癌に関する研究特にCPL分類、リンパ節転移及び異常尿反応について
Author(s)	川端, 健造
Citation	大阪大学, 1960, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28212
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【33】

氏　名・(本籍)	川　端　健　造（かわばた けんぞう）
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	第　79　号
学位授与の日付	昭和35年3月21日
学位授与の要件	医学研究科外科系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**子宮頸癌に関する研究** **特にCPL 分類、リンパ節転移及び異常尿反応について**
論文審査委員	(主査) 教授 足高 善雄　(副査) 教授 宮地 徹　教授 須田 正巳

論文内容の要旨

研究題目

子宮頸癌に関する研究，特に CPL 分類，リンパ節転移及び異常尿反応について

発表学会及び雑誌

昭和33年4月，第10回日本産科婦人科学会総会

昭和33年11月，第17回日本癌学会総会

昭和34年3月，第11回日本産科婦人科学会総会

日本産科婦人科学会雑誌，12：1005.1960.

研究目的

癌治療の要諦は，早期診断法によって之を早期に発見し，出来るだけ早期に治療することにある。他疾患と異り，根治療法を施しても一応再発という点を考慮に入れねばならない。故に，予後の予知という問題に従来からも深い関心が払われ，Broders, Martzloff, Hueper の分類，CPL 分類等の組織学的な方法の他，膣内容，癌の進行期，リンパ節転移，浸潤度等と予後との関係について多くの報告がなされている。一方 Daris 反応等の生化学的方法も同様な目的で試みられ，足高教授によって見出された妊娠異常尿反応は頸癌にも陽性出現頻度が高く，臨床経過と略々一致した態度を示すとされている。

ここに於て，著者は子宮頸癌の予後との関連に主眼をおき，最近2ケ年の当教室に於ける頸癌手術患者について，臨床病理学的な研究（特に CPL 分類とリンパ節転移の問題）を行うと共に異常尿反応の変化を追求し，子宮頸癌治療に於ける之等の臨床的な価値を検討した。

研究方法

当教室に於ける最近2ケ年の頸癌患者428名中，根治手術として広汎性子宮全剔出術を行った137例から得られた剔出標本を研究対象とした。

1）CPL分類：標本は，剔出後10%ホルマリン液固定を行い，Javert の方法により子宮頸部の矢状面より

癌塊の辺縁乃至周囲組織を充分に含めた全割標本を作製，パラフィン包埋，H・E 染色を行い，CPL 分類の判定は今井に従った。

2）リンパ節転移：リンパ節は，剔出後10%ホルマリン液固定，パラフィン包埋，段階切片としてH・E 染色，一部には Pap 氏鍍銀染色を施した。

3）異常尿反応：異常尿反応の実施は，頸癌患者の手術前並びに術後も長期間にわたり，その臨床経過の観察と共に行った。

尚，手術時開腹所見により後照射を必要としたもの並びに術後の経過により放射線療法を必要と認めたものを照射必要群とし，後照射の必要を認めなかったものを照射不要群とした。

研　究　結　果

1）CPL 分類：(i) 若年者に L 型が多く，高年者に C 型が多かった。(ii) 臨床所見と組織所見より進行期を分類すると，臨床所見により分類した時とは異り，組織所見では進行期の進むに従って C 型は減少し，L 型は増加した。(iii) 肉眼的腫瘍形態，組織型分類，腫瘍発育先端部の細胞浸潤と CPL 分類との間には，特異な関係は認められなかった。(iv) 術後放射線療法を要しなかったものは C 型が多く，照射必要群ではL型が多かった。

2）リンパ節転移：(i) リンパ節転移は進行期の進むに従って高頻度となり，子宮頸癌の隣接組織（旁結合織，膣壁及び子宮体部）に癌浸潤あるものには転移を多く認めた。(ii) 剔出リンパ節の転移頻度は，上腹節，旁子宮節，腸骨節，閉鎖節，深鼠径節の順であり，下腹節，腸骨節に於ては大豆大以上，閉鎖節，旁子宮節では小豆大以上となると癌転移を証明する頻度が大であった。(iii) 癌転移を認めたリンパ節では，皮膜肥厚，細胞浸潤等がみられるものが多く，非転移リンパ節では，中心・中間洞に於て細網細胞のみならず細網線維の増生を多く認めた。(iv) 術後照射必要群は，照射不要群に比し明らかにその転移率が高く，CPL 分類との関係をみると L型 に転移度が高かった。

3）異常尿反応：(i) 子宮頸癌患者の術前 72.2% の陽性率を示した異常尿反応は，進行期の進むと共にその陽性出現頻度を増した。CPL 分類からみて，C 型は P.L 型に比し出現率低く，P.L 型の進行度の高度のものには高頻度の出現がみられた。(ii) 頸癌根治手術により異常尿反応は術後速かに陰性化するものが大半を占め，術後放射線治療を必要としたものは照射不要のものに比し，明らかに高い陽性出現頻度を示した。

総　　括

以上の成績は日時の関係で何れも5ケ年以上の遠隔成績をみていないが，放射線治療の要否を一つの指標として眺めた場合，CPL 分類，リンパ節転移と術後の異常尿反応の出現態度が近似した態度をとるとの事実を明らかにした。従って，頸癌根治手術に際しては，CPL 分類，リンパ節転移等の病理組織学的な検索等を可及的多方面より検討し，更に，退院後も引き続いて可能な限り頻回の異常尿反応を実施する事が望ましいとの結論を得た。

論文の審査結果の要旨

本論文の要旨は，昭和33年，同34年第10回並びに第11回日本産科婦人科学会総会及び昭和33年第17回日本癌学会総会に於て発表された。

著者は,子宮頸癌の組織学的分類とその予後との関連に主眼をおき,阪大産婦人科学教室に於ける最近2カ年の頸癌手術患者137例について臨床病理学的な研究(特に CPL 分類とリンパ節転移の問題)を行うと共に異常尿反応の態度を追求し，子宮頸癌治療に際してそれぞれの臨床的な価値を検討しようとしている。

即ち，第1編では，子宮頸癌根治手術による剔出標本を10%ホルマリン液固定を行い，Javert の方法により子宮頸部の矢状面より癌塊の辺縁乃至周囲組織を充分に含めた全割標本を作製し，パラフィン包埋。H・E 染色を行い，今井による CPL 分類を適用した。第2編では，剔出リンパ節を10%ホルマリン液固定，パラフィン包埋，段階切片としてH・E 染色，一部には Pap 氏鍍銀染色を施して頸癌に於けるリンパ節転移について研究した。第3編では，頸癌患者の手術前並びに術後も長期間にわたり，その臨床経過の観察と共に異常尿反応を実施した。尚，子宮頸癌根治手術の予後との関連をみるために，手術時開腹所見にもとづいて後照射を必要とするもの並びに術後の経過により放射線療法を必要と認めるものを照射必要群とし，後照射の必要を認めないものを照射不要群に分類して比較検討した。

研　究　結　果

1）子宮頸癌は組織学的にみて若年者にL型が多く，高年者にC型が多い。臨床所見と組織所見とより進行期を分類すると，臨床所見により分類する時とは異なり，組織所見では進行期の進むに従いC型は減少し，L型は増加する。肉眼的腫瘍形態，組織型分類，腫瘍発育先端部の細胞浸潤と CPL 分類との間には特異な関係は認めていない。術後放射線療法を要しないものはC型が多く，照射不要群では L 型を多く認める。

2）リンパ節転移は,進行期の進むに従い高頻度となり,子宮頸癌の隣接組織（旁結合織，膣壁及び子宮体部）に癌浸潤あるものには転移を多く認める。剔出リンパ節の転移頻度は，下腹節，旁子宮節，腸骨節，深鼠径節の順であり,下腹節，腸骨節に於ては大豆大以上,閉鎖節，旁子宮節では小豆大以上となると癌転移を証明する頻度が大である。癌転移を認めるリンパ節では，皮膜肥厚，細胞浸潤等がみられるものが多く,非転移リンパ節では,中心・中間洞に於て細網細胞のみならず細網線維の増生を多く認める。術後，照射必要群は，照射不要群に比し明らかにその転移率が高く，CPL 分類では L 型に高い転移度がみられる。

3）子宮頸癌患者尿について所謂足高氏異常尿反応を実施したが，術前は高い陽性率を示し，進行期の進むに従い陽性出現頻度は増し，CPL 分類を行うと，C 型は P，L 型に比し出現率低く，P，L 型の進行度の高度のものには高頻度の出現がみられる。頸癌根治手術により尿反応の陰性化するものが大半を占め，術後放射線治療必要群では不要群に比し高頻度に異常尿反応の陽性を示している。この異常尿反応の信頼性，更に本態については，尚今後の研究にまたねばならない。

以上の成績は研究期限の関係で5カ年以上の遠隔成績をみていないので直ちにその予後を云々する事は出来ないが，術後の予後を放射線治療の要否に一つの指標をとって眺める場合，CPL 分類，リンパ節転移と術後の異常尿反応の出現態度との間には一定の密接な関係のあるとの事実を明らかにすることが出来た。従って，頸癌根治手術に際しては，CPL 分類，リンパ節転移等の病理組織学的な検索を可及的多方面より行い，更に退院後引き続き異常尿反応を頻回実施することが予後を知る上に望ましいとの結論に到達した。子宮頸癌治療とその予後判定の上に有力な臨床治療の指針を提供したものであって学位論文として価値ある論文である。